カント美學の一考察

山本万治郎

一

埃及のイシスの神殿には今日もなほ、「われは現に在るもの、既に在りしもの、またまさに在らんとするものの總てなり。如何なる人の子も未だ曾つてわがヴェールを揚げたるものなし」（Ｖ. ｄ. Ｕ.）といふ題詞が掲げられてゐるといふ。永遠にして全智全能なる神は理性的存在そのものであり、それ自ら缺ける所がない故に、「神は哲學しない」とも稱せられた。全智全能である神にとつては哲學は不要であり、沒理性的な動物にとつては哲學は不可能であらう。何故なら、哲學するといふこと自體が、神と動物の中間にある人間の感性的であると同時に理性的であるといふ、人間の本質に由來する行爲であるからである。即ち人間のみが哲學するのである。かくてこそ、人間は、たとひ女神のヴェールが有限と無限とを隔て時間的なるものを永遠なるものから區別しようとも、有限的・時間的であり乍ら、永遠にして無限なるものに面接し得る唯一の存在者たり得るのである。永遠なるもの、無限なるものの認識が、有限性・時間性の上に立つ人間の自覺への願ひであるならば、かかる絶對的なのもの實現は叡知性の上に立つ人間の自覺への願ひであるであらう。認識に於ける永遠無限なる絶對者は、現象を超えた物自體として認識の埒外に退くのに對し、實踐に於けるそれは最高善（究極目的）、即ち理想として實現の彼所に無限に退く。カントの第一批判並びに第二批判の持つ問題性を一應この樣に指摘し得るならば、批判の全體系の完結への課題を擔はされた第三批判、就中美的判斷力批判に於て、「一般に美は、ひとり動物的・理性的存在としての人間にのみ妥當する」と述べられてある如

く、(ℵ) 美は人間が屬する感性界と叡知界とが二つの世界に客觀的に分裂對立する以前の、或る高次の統一のもとにある全的人間（美的人間）の自覺の姿であると言ひ得るであらう。有限と無限、時間と永遠との統一の成立形成は、等しく人間の本質的行爲であり美的人間の自覺への願ひであると言ふことができる。

カントは三批判書を通じて、先天的なるもの（a priori）が後天的なるもの（a posteriori）と、先驗的なるものが經驗的なるものと、超感性的なるものが感性的なるものと、如何にして結びつくかといふ困難な問題に總てを捧げたとも言ひ得るのであつて、その努力の結晶である先驗的論理學は、先驗的なるものと經驗的なるものとを客觀的に結び付け「眞理の論理學」とも呼ばれた（K. d. r. V. B 74）。即ち第一批判では所與の直觀の多樣が悟性によつて思惟せられることによつて、對象の認識、即ち經驗が成立するのであるが、その際、思惟の自發性が異質的なる直觀の多樣と結び付く媒介になるものが時間圖式であつた（Von d. Schematismus d. reinen Verstandesbegriffe B. 176-187）。けれども、經驗の可能性について「經驗一般の可能の制約は、同時に經驗の對象可能の制約である」と述べられた如く（B. 197）、ここでは「認識能力の對象が問題とせられた」と言ひ得る（K. d. P. V. Philos. Bibliothek S. 16）。これに對し第二批判では、「汝の意志の格率が常に同時に普遍的立法の原理として妥當し得る樣に行爲せよ」（S. 36）といふ道德律は、根源的に立法的な理性の唯一の事實にして、而も如何なる經驗的原理にも基くことなしに「先天的綜合命題として吾々に迫りくる」のである（S. 37）。そこでは認識の對象が問題になるのではなく、對象を實現する能力即ち意志が問題になる。意志は實現されるべき對象、即ち究極目的をもたねばならぬ。たとひこの目的は最高善であり、實現の彼所に退く理想であるとは言へ、吾々の行爲は感性界に於て生起する一の出來事となるべき必然性を擔ふ。その際、感性界の自然が叡知的自然の範型（Typus）として使用せられ、謂はば法則そのものの圖式、即ち道德律の範型が見出されたのである（S. 80-82）。以上、理論的並びに實踐的判斷の綜合性（眞理性）の媒介になるものは、圖式（時間）と範型（形式上の自然律）であつた。

カントが先驗哲學の名の下において提出した純粹理性本來の課題は、「如何にして先天的綜合判斷は可能であるか」といふ問題であつた（K. d. r. V. Einl. IV）。この根本基調にもとづいて提出せられた美的判斷力批判の課題は、主觀的であるにせよ、對象でもあり同時に法則でもあるといふ美的判斷が含蓄する綜合性は、如何にして可能であるかといふこと、しかもそれは美的判斷に於ける純粹判斷力の先天的原理にかかはると述べられた（§30）。かかる原理は、理論理性もしくは實踐理性の限定下に働く判斷力を問うて發見せられるものではなく、對象の形式に就いての反省のために、判斷力が「自己自身律」（Heautonomie）として自己自らに對して法則を指定せざるを得ないといふ判斷力の「主觀的原理（格率）」（Elektum V.）に他ならず、而もこの對象でもあり法則でもある、判斷力獨自の綜合的な主觀的原理は、專ら對象の形式をのみ反省する美的判斷力の批判によつてはじめて見出され得たのである。

元來、反省判斷力は與へられた特殊に對して普遍を反省的に見出さねばならぬ故に（IV.）、世界のあらゆる現象に「體系的な秩序」を與へ「經驗の體系」を可能ならしめんとする意圖をもつ（IV. V.）。この意圖を達成するために反省判斷力が自らに法則として與へねばならなかつた原理が、「自然の合目的性」といふ主觀的原理である。この原理によつて體系的な秩序にまでもたらされる世界のあらゆる現象は、自然律による現象か自由律による現象かの孰れかである。從つて、現象としての自然と感性界に於ける現象としての自由の諸結果といふ異質的な現象を、體系的に秩序づける反省判斷力の原理、即ち「自然の合目的性」は、自然概念と自由概念、自然と道德との媒介に役立つものとして考へられたのである（IX.）。換言すれば、意志の對象である目的と認識の對象といふ異質的なるものを、合目的的なるものとして、主觀的にはせよ謂はば同質化する反省判斷力の「先驗的原理」が（V.）、しかもそれは「自然の技巧」（Erste Einl. VII.）であると同時に主觀の技巧でもある「自然の合目的性」が、對象の反省の根抵に置かれたのである。

然し乍ら、專ら對象の形式をのみ反省する美的反省判斷（IV. VII.）、即ち美的判斷は、對象の形式の反省に本づく、從つて又かかる反省から感受せられる快（Einl. VII.）に對する、換言すれば、或る一つの客體の表象が認識とは無關係に單

に主觀と關係づけられる際、表象に於ける全然認識要素となり得ざる主觀的なるもの、卽ち表象と結付いた快不快の感情（美的感情）に對する、構成的原理であると述べられた（IX.）。この樣な美的判斷の根抵に置かるべき所謂主觀的・形式的合目的性（目的なき合目的性若しくは美的合目的性）は、異質的なるものの主觀的統一、卽ち主觀的に合目的的なるものといふたとひ觀念的對象性をしかもち得ないにはしても、感情的に新たなる對象を誕生せしめる原理である。美的合目的性は美的對象創造の原理である。それは美的判斷力が自然の評價、事物の形式についての反省のために自らに法則として與へる原理であると同時に、對象產出の原理でもあるのである。かかる原理は、認識の對象を構成する原理（自然律）でもなく、目的實現のための意志を規制する原理（道德律）でもなく、認識の對象と意志の對象との間に張られたそれ自身主觀的に統一的な謂はば第三の原理である。美的判斷力の「現象」（Phänomen）（Vorrede）、卽ちそこに於て美的合目的性が自己を實現してゐる美的現象は、それが客觀的・概念的に分裂せしめられ、理論的並びに實踐的に解體される時、自然と道德との對極的な二つの世界へと分極せられ得るでもあらう。換言すれば、認識の對象と意志の對象が美的現象といふ同一平面上に於て對立するのではなく、美的現象の奥深くにおのづから見出された對立者であり、美的合目的性はこの對立者を主觀的に越えたそれ自身主觀的に統一的な原理、卽ちそれ等の對立を次元的に越えた原理である。それ故、分析論に於て質量の數學的範疇の上から見て、美の無關心性並びに無概念性が提示せられたのは（§3, §6.）、蓋し美の無關心・無概念的性格そのものがかかる美的原理の現象的性格にほかならないからである。

一般に、美的現象を美的判斷力の原理である美的合目的性から導出する仕方が、概念による認識に於ける如き概念的明瞭性をもち得ないのは（Vorrede）、この原理の性格に本づく。此樣な原理を對象とする「美的判斷力の批判」が、あらゆる哲學の豫備學（Propädeutik）であると言はれたのは（Einl. VIII.）、蓋し美的合目的性といふ「先驗的原則（原理）」――自然評價の原理――（VIII.）に貫かれた、評價する主體及びその認識能力を批判するものであるからであ

る。

二

美的判斷力の現象一般を美的現象と呼ぶ。それは趣味と天才、觀照と創作とを通じて、美的合目的性が自己を實現するもの、卽ち主客・內外等を却つて觀念的なるものとして內に含む感情的に實在的なるものとして成立する。この樣な美的現象は、法則としての美的合目性性を表現し乍ら（Einl. VII.）、同時に美的對象を感情的に實在的なるものとして體驗せしめる自律的現象である。美的合目的性は、常に自己限定的に經驗的・個別的な美的事實、美的體驗として成立する。然し乍ら、その際美的判斷力が、所與の客體、たとひそれが一定の形式を具備したものであらうと不定なる形式の中に自己を沒した沒形式なるものであらうと、その表象に主觀的統一を與へ、美を評價する能力卽ち趣味（§ I）として實現する場合、カントのいふ美的判斷（美的判斷力の）が成立するのである。從つて美的判斷は美的現象成立の一つの仕方であると言はねばならない。

美的判斷は、與へられたる客體の形式に對して普遍を求める狀態、卽ち美的判斷力が營む、所與の客體とそれに對して求めらるべき普遍との形式的若しくは主觀的包攝作用にほかならない。その客體は、客觀的には外延量（extenn sive Größe, Quantum）（K. d. r. V. B. 203.）並びに內包量（intensive Größe, Grad, Qualität）（B. 208）をもつが、それら感覺の量が美の規定根據であるとすれば、美の測定は感覺的享受の大いさ・度合といふ經驗的なるものによる結果、美の普遍妥當性は成立しない。しかし一切の感覺的・現象的量を、排除した美的對象は空虛にして何物でもあることはできず、事物のかかる量、卽ち經驗的所與の實在に主觀が無關心・無概念的に、言ひ換へると、「美的」卽ち感情的に關係せしめられる所にこそ美の具體性が成立するのである。そこに美の具體性が成り立つ場は、「對象として客觀化しない直觀」（Jahrbuch für Philosophie u. phän. F. Bd. XI. H. Märchen, Einbildungskraft bei Kant S. 169）、もしくは「距離を挿入した觀照」にほ

かならない（J. 14）。かかる場が同時に經驗的所與をして美的存在たらしめる形式、即ち美的形式でもあらねばならぬことは、「美的」であること、即ちこの場が美的原理の現象的性格であり、美的原理の自己限定の方式である以上、疑ふべからざる美の事實であらう。美的存在は、經驗的所與の客觀的なる外延量もしくは內包量ではなく、主觀的・觀念的な外延量內包量をもたねばならぬ。私はそれを「美の量」と名付けよう。美的存在は美の量をもたねばならぬ。それは客體を評價する主體の中に、「對象として客觀化しない直觀」として、現はれるのである。

さて、美的判斷力の現象は、客觀的原理を峻拒し（K. d. U. §11）、獨自の主觀的原理に本づいた自律的現象であつた。從つて美的判斷は、他の諸々の原理による他律化から、その自主性をまもらねばならぬ。即ち、それは一切の質料（感官的感覺並びに概念）から「自由なる判斷力の判斷」でなければならない（Allg. Anmerk. nach §29）。そこには、悟性乃至は理性が外から客觀的に制約するのではなく、內からの悟性形式、理性形式との主觀的調和が成立するのである。それは「構想力と悟性（若しくは理性）との主觀的一致（Allg. Anmerk. nach §22, §22.）、換言すれば、構想力と悟性との「自由遊動」（§35）である。この「自由遊動」は美的原理、即ち美的合目的性の自己實現の一つの方式である。

しかし乍ら、「自由なる判斷力の判斷」である美的判斷には、自由なる構想力が働かねばならない。構想力は本來直觀の多樣を把捉する能力ではあるが、それが自由なる構想力として、外からの、即ち悟性もしくは理性の法則による制約からは全く自由に對象の形式を把捉し乍ら、しかもそれが反省的・自己自律的であるためには、その自由なる把捉作用をも、尙且その下に包攝すべき、名付くべからざる普遍を內に形成し乍ら、外に向つて自由に活動しなければならない。換言すれば、自由なる構想力は「悟性の合法則性一般」との調和に於て活動しなければならない（Allg. Anmerk. nach §22）。このことは、美的原理である美的合目的性の原理的要求である。何故なら、「美的合目的性は判斷力の自由に於ける合法則性」であるから（Allg. Anmerk. nach §29）。かくの如く、美的判斷に於ける構想力の作用は、「自由なる合法則性」・「法則なき合法則性」を擔はねばならない。かくして、「趣味とは、對象を構想力の自由なる合法則性

との關係に於て評價する能力である」と稱せられた（Allg. Anmerk. nach §13）。かかる構想力は、當然、美的合目的性の實現を擔ひ、その活動は美的原理の自己實現の場でなければならない。

だがしかし、構想力は、先驗的に純粹悟性概念卽ち範疇を手引として圖式を産出し時間化しなければならない。圖式（時間）は、客觀的認識に於ける、判斷力による包攝の手續にほかならない（K. d. r. V. Von d. Schematismus d. r. Verstandes begriffe）。然るに、美的判斷に於ける構想力の活動は、美的合目的性の自己限定前、卽ちその自己實現の場として、自由にして合法則的である。言ひ換へると、構想力は「概念なしに圖式化し」（K. d. U §35）、沒形式な「自然を理念に對する圖式として取扱ふ」ものであるとされたのである（§22）。元來、圖式は概念と不可分離的である、理念は實現されるべきものである。しかもその實現の媒介になるものは範型卽ち形式上の自然律（自由の法則そのものの圖式）であつた（K. d. r. V. Von d. Typik d. r. praktischen Urteilskraft）。にも拘らず、構想力によつて概念なしに圖式化され時間化されたものも、或る超感性的なるものといふ「不定の理念」（K. d. U §35）に對する圖式として取扱はれた自然も、共に當然主觀的なるもの、換言すれば、內に求めつつ形成せられる或る名付くべからざる普遍の下に、主觀的に包攝せられつつあるものにほかならない。

美的合目的性の實現を擔ふ自由にして合法則的な構想力の活動は、經驗的には與へられたる客體の質料に對して無關心・無概念的であり、先驗的には概念なしに圖式化し自然を理念（普遍）に對する圖式として取扱ふのである。それを、認識能力相互の關係から見れば、構想力と悟性との自由遊動であり、更には、構想力と理性との對照（Kontrast）もしくは背反（Widerstreit）による兩者の調和乃至は協和にほかならない（§21）。この構想力の自由なる把捉作用が、同時に求められるべき普遍の主觀的・感情的なる時間化、顯現を意味しなければならない。ここに、感情的に實在的な美の量をもつた、美的存在が創造せられるのである。この樣に、美的原理、卽ち美的合目的性の實現を擔ふ構想力を、私は「美的構想力」と名付けよう。

シュミットは、美なるものの覺知に際して、構想力は恰も悟性そのものであるかの如くに振舞ふと言ふ（R. Schmidt, Kants Lehre von Einbildungskraft S. 24, S. 39-40）。更に言葉を次いで、その場合、構想力には悟性の直接的・客觀的な協働（Mitwirkung）が拒絶せられてゐる點から、構想力を盲目的に働く悟性として特徴づけ、所與のものを「悟性に適つて」（verstandesgemäß）、即ち「圖式的に」（schematisch）取扱ふ自發的・生産的・意識以前の根源力としたのである（S. 30）。換言すれば、構想力は一定の範疇に從つてではないが、悟性範疇に適合する（gemäß）未限定なる直觀的圖式を使用するのであつて、その營みは概念構成的ではなく、構想的（einbildlich）なる先驗的綜合である（S. 31）。故に構想力の遊動は、氣儘勝手な聯想に走ることではなく、先驗的綜合に於ける、即ち時間に於ける展開に對する別の表現に過ぎないと言ふ（S. 33）。かかる解釋は、純粹理性批判の主觀的演繹論を典據とし乍ら、認識論に於ける構想力から、美を覺知する構想力を區別したにとどまり、そこには美的原理からの考察は見出されない、從つて彼の解釋は勞ひ消極的たらざるを得ないのである。美的世界は、自然や道德の世界とは別の獨自の原理をもたねばならない。故に、「人間は世界を新しい方法で會得するために、世界を今一度無知の世界として觀察したければならない。……「藝術的認識（新しい方法）に精通せんとするものは、自己の精神を哲學的思索の桎梏に捕へられてはならない。……最高の認識力もそれが哲學的に活動する間は無用である」と（Fiedler, Über die Beurteilung von Werken der bildenden Kunst）、フィードラーも述べてゐる如く、美的構想力は、理論的認識の立場からではなく、先づそこから超脱してこそ、原理的に理解され得るのである。即ち美的構想力は美的合目的性の自己實現の場であると理解され得た。

この様に、美的原理を擔ふ美的構想力の展開、即ち美的判斷力の判斷の規定根據は何であるか。吾々は美を概念や一定の目的によつてではなく、主觀的根據からのみ評價する。何故なら、自己立法的な美的判斷力が、吾々をして美的評價の「規準」を、吾々自身の中に求めしめるからである（K. d. U. §§ 2）。それは反省作用の深底に置かれるべきものであらう。即ち、美のかかる規定根據は、認識一般が可能となるために必要不可缺なるものとして、一切の人間に

於て豫想せらるべき判斷力一般の主觀的形式的制約、即ち判斷力一般の主觀的原理である（§38, §35）。それは美的判斷に於ける純粹判斷力の先天的諸原理に關はるものとして、個々の美的判斷（現象）に論理的に先立たねばならない（§36）。それはまた、個々の美的判斷（趣味判斷）、即ち美的構想力の自由にして合法則的な時間的展開に於いて、對象の表象と結合せるものとして知覺せられる、快即ち美の普遍妥當性を先天的に主張せしめるものである（§37）。ここに、美的判斷が含蓄する綜合性は如何にして可能であるかといふ、美的判斷力批判の課題の解決がかかってゐるのである。この樣な、美的判斷（趣味判斷）一般の、換言すれば美の普遍妥當性に對する、權利要求を正當づけ證明する純粹美的判斷の演繹は、同時に趣味の原理に關する批判を意味し、趣味判斷一般の可能性の根據、即ち美的判斷力の合法則性、從つてまた、美的構想力の自由なる合法則性の內面的可能性の根據を衝くものである（§55）。

趣味判斷一般の可能性の根據、もしくは、美の普遍妥當性を權利づけるもの、それは、趣味判斷の要求する必然性の制約としての、「共通感」（Gemeinsinn）の理念である（§20）。この理念は、「評價能力の理念」として（§40）、對象として客觀化しない直觀に徹底終始する故に、所謂常識（gemeiner Menschenverstand, sensus communis logicus）から明別せられて特に美的共通感（sensus communis aesthetic us）と稱せられた（40, §20）。從つて、この美的共通感の理念の前提の下にのみ、各人獨自の趣味に基づいて下された夫々の趣味判斷は、先天的に豫想せられたこの理念、即ち評價能力の理念の自己限定面でなければならない。趣味判斷の規定根據であるこの理念が、また趣味判斷相互間の抗爭可能の根據ともなるのである（§56, §57）。何故ならば、この理念は、個々の趣味判斷を內に越えて省みられる時に見出されねばならないものであるからである。しかし乍ら、美的共通感、もしくは評價能力の理念は、認識能力の自由遊動、即ち構想力の個別的表現（Darstellung）に於てのみ表象せられ得るもの（§17）、換言すれば、美的構想力の時間的展開として自己を實現するよりほかはないが、この理念は、美的構想力の時間的展開の深

底に根源的に豫想せらるべきものである。從つて、この理念は、美的構想力によつて實現せらるべきもの、即ち、（美的）構想力の理想にほかならない（§17）。

以上の如く、趣味判斷の規定根據を問ふことは、美の規準を問ふことと共に、等しく美的現象（美的判斷）の原理的洞察に屬さねばならない。それはまた、一定の觀念による美の客觀的規準が存し得ないこと、更に趣味（美的判斷力）の客觀的原理が絶對に不可能であるのと一般である。即ち、ここに「それ自ら必然的に美的なる美の規準が豫想せられねばならない（H. Mörchen, Einbildungskraft bei Kant S. 134-5）。それは、カントによれば「趣味の典型（原型）」の名の下に、趣味の客體並びにそれによる評價の實例の總てに亙つて、更に他人の趣味をさへも評價し得べき——何人もそれを自己自身の中に產出しなければならない——單なる理念が、意味せられた（K. d. U. §17）。この單なる理念は評價能力の理念にほかならない。それ故、それ自ら必然的に美的なる美の規準は、趣味判斷を內に越え主體の中に產出され、見出されねばならない理念である。これが、趣味判斷一般の可能性の根據であり、又趣味の二律背反に解決を與へるのである（§57）。換言すれば、それは、趣味判斷の最後の想[illegible]根據としての「人間性の超感的基體」にほかならない（§57）。しかし、趣味判斷を規制し、それを規定する根據としての「人間性の超感性的基體」は、吾々の內なる超感性的なるもといふ不定の理念——それ以上に把握され得ようもない——であるに過ぎないが、それが、趣味といふ、而もその源泉が吾々自身には隱されてゐる、能力の謎を解くべき唯一の鍵として殘るのである（§57）。

しかし、それにはしても、自律的な美的現象（趣味判斷）の無限の深底に必然的に豫想せらるべき理念、言ひ換へると、人間の全能力の歸一點として、現象としての對象及び判斷する主體の根柢に橫はる人間性の超感性的基體といふ不定の理念が、認識能力相互（構想力と悟性）の遊動・協和、乃至は美的構想力の營みの原理である美的合目的性に從つて、或る直觀に關係づけられる場合、それを「美的理念」と稱する（§57, Anmerk. I）。かかる場合、美的對象は、客體の外延量內包量を主觀的に、卽ち內から理念的方向に於て否定する。從つてそれは無關心・無概念的な

「美的直觀」として成立しなければならない。換言すれば、趣味能力の謎を解くべき唯一の鍵と看做されたかの不定の理念が、美的合目的性を方式として自己を實現する美的現象、もしくはその深底に横はる必然性の制約が省みられた美的現象の現象的性格が「美的理念」である。從つて、「美的理念」は時間化する理念とでも稱すべきものであり、「美的直觀」はかの理念を圖式化すべきもの、もしくはそれの圖式と看做さるべきものである。「美的理念」「美的直觀」は原本的に一つであるべきである。

以上の如く、趣味能力（美的判斷力）の批判は、趣味能力の謎、換言すれば、趣味判斷の最後の規制根據としての「（美的）人間性の超感性的基體」といふ不定の理念として殘つた。それは、趣味が自己を深めることによつて、おのづから自己の中に見出すべきものである。しかし、カントは、別の意味に於てこれを描寫能力としての構想力の理想、即ち美の理想（Ideal der Schönheit）と呼んだのである（§17, §23, §35）。即ち彼によれば、この理想は、人間を內面的に支配する倫理的な諸理念を表現してゐる人間の姿・表情の、しかもそこから倫理的なるものを除けば普遍的・積極的に氣に入らない樣な、美に對して求められるべきものとせられた。端的に言へば、それは倫理的なるものの表現に於てのみ成立し得る理想である（§17）。從つて、これは美の中にではなく、その外に求められた。それは、倫理的なるものを規制する究極の根據としての「叡知としての人格に於ける人間性」にほかならない（§1）。かかる概念に制約せられたる美的評價は明らかに純粹性を缺く（§16, §17）。吾々は自然のみならず倫理的なるものをも美的に評價し得るが、美を倫理に據らしめることはできない。カントに於ては、美の理想は倫理性への移行を要求するでもあらう。かかる美の理想が、もつぱら適し得るとせられた、人間の內的なるものの結果としての姿・表情、それを評價せんとする者、況やそれを現はさうとする者に於ては尙更、理性の純粹理念と構想力の偉大なる力との結合が要求せられるとはいへ（§17）、道德律自體が感性界の法則を徹底的に峻拒する故に、かの理想は彼岸的たらざるを得ない。從つて、實現の彼所に退くこの理想に向つて拂はれる努力は不幸なる努力ででもあらうし、それは夢想する構

想力の幻像に過ぎないであらう。

吾々は、美的構想力を自己實現の場とする趣味能力の謎、卽ち萬人共通のしかも深く隱れたる根據を「美的人間性の超感性的基體」として見出した。この不定の理念と一つになつた高次の現象、而もそこに於て美的原理が自己を實現してゐるが如き美的現象の成立は、意識のより深い層に於ける避け難い要求である。かかる高次の美的現象に於ては、美的合目的性は、人間をして、外界に向つてはそれを內に越えしめ、內に普遍を形成せしめ乍ら外は向はしめると言つた、內外、主客、或ひは感性と理性等、總じて異質的なるものを主觀的に統一し宥和せしめる。この樣な原理に貫かれた美的人間は、感性と理性その孰れにも原理を見出し得ず、專ら、絕えず感性と理性、內外・主客等一般に異質者への對極的なる分裂解體に曝され乍ら、主觀的にその統一を維持し續ける人間である。シラーの所謂「理想人間」であらう。しかし、かの「美的人間性の超感性的基體」を形成的に美的現象として實現せしめることは、美的人間の成立と相卽し、美的人間の自覺の姿である。

美的人間の可能性としてのかの不定の理念が、「直觀の能力」である構想力と（§35）、直接に美的に關係づけられる場合があるとすれば、美的原理の否定面に於て、「沒限界性」を表象する沒形式なる對象が見出される時である（§23）。この兩者の間に成立する美的現象を、名付けて崇高なる美的判斷といふ。

三

カントは「眞の崇高性」は心意（§26）、卽ち人間の本性としての「思念樣式」に歸屬せらるべきものと言ひ（§23、§30）、またそれを外界の自然から自由なる存在者（卽ち人間）の崇高性もしくは「精神能力の崇高性」とも稱した（§30）。崇高性は崇高なるものの理念である。それが外界に轉置せられて、沒形式な外界が、非本來的に間接に、崇高であると言明せられるのである。卽ち、自然の表象に於ける感性的なるものが、可能的な超感性的使用に適せるも

のとして評價せられるといふ關係の中にのみ、崇高なるものとして成立するのである（Allg. Anmerk. nach §29）。換言すれば崇高なるものは、崇高性卽ち崇高なるものの理念の描寫に役立つものとして評價せられた、客體の表象に於ける沒形式性もしくは沒限界性にほかならない。簡單に言へば、沒形式な自然は、崇高性による否定を媒介としてはじめて崇高なるものとして成立するのである。崇高の理念の描寫に役立つとされた崇高なるものは、美的合目的性の自己限定面に於て、外界との無關心・無概念的な關係の中に成立するより他はないが、その際、美的合目的性は客體を理念的方向に於て否定する作用を內に藏すると言はねばならない。

しかし乍ら、元來、超越的な理念の描寫といふことは矛盾であり、「直觀的悟性」をもたぬ人間——カントによれば——には不可能であらう。にも拘らず、客體が表象する沒形式性が、崇高の理念の描寫に役立つものとして思念せられ評價せられるためには、客體の沒形式性が「大きさ」（Größe）もしくは「力」（Macht）として、しかも凡ゆる比較を超えて絕對的に大であるとして認められねばならないのである（§23, §25）。カントは、崇高なるものを、「大きさ」に關聯して「數學的崇高」、「力」に關聯して「力學的崇高」と呼ぶ。蓋し、「數學的」「力學的」とは、範疇の二つの秩序であり、前者は「直觀」（直觀の對象）に、後者は「現象の存在（Dasein）一般」（直觀の對象の實在 Existenz）に關係するからである（K. d. r. V. B 199, B 110）。從つて數學的崇高は認識能力に、力學的崇高は意欲能力に關して考へられるのである（§24）。

崇高なる美的現象を、カントに倣つて數學的に見るならば、客體の沒形式性を絕對的な大きさと看做すことである。かかる絕大なるものについての美的評價が可能となるための、それ自身美的なる根本尺度は、論理的尺度においてのやうな數概念の比較を越えてゐる。卽ち絕大なのである。それを主觀の中に反省すれば直感的に最大なる尺度であり、外界の自然の中に反省的に求めると自然の眞の不變的根本尺度、卽ち自然の絕對的全體であり、現象としての自然に關しては總括せられたる無限性である（§26）。この樣に、自然及び同時に主觀の根柢に橫たはる美的尺度に

よつて、絶大なる大きさの美的評價が可能となるのである。所詮それは、絶大であると思惟し得る思惟能力の大きさにほかならず、自然の不可測性に對する心意の優越性の意識である（§28）。これは、自然及び同時に吾々の思惟能力（主觀）の根柢に横たはる超感性的基體の意識である（§26）。即ち、自然と自我、内外、主客が共にそこに於てある超感的基體が、數學的に見られた崇高の美的尺度であり、外界に轉置せられる崇高の理念である。かかる超感性的基體を、大きさの美的評價の尺度たらしめるものは、思惟能力の大きさであつた。

客體の沒形式性を力學的に、從つて力として見れば、それは吾々を恐怖の中に壓倒せざる力でなければならない（§28）。力とは大いなる障碍に打克つ能力であり、障碍に對する優越性である（§28）。かかる力を外に求めては「自然の外觀上の絶對威力」、内省されては「吾々の超感性的使命」と稱せられた（§28）。元來、感官の對象としての自然が、吾々に對して含蓄し顯示する數學的な大きさを、理性理念と比較して小なりと評價することは、理性本來の實踐的意圖から言つて、吾々にとつて法則であり、吾々の超感性的使命に屬さねばならぬ（§57）。障碍に對する優越性としての力は、唯「抵抗の大きさ」によつてのみ評價せられる故に（§28）、大きさは力の否定的契機である。それ故、思惟能力の大きさ、もしくは自然の不可測性に對する心意の優越性の意識は、本來的に超感性的使命に屬さねばならぬ。しかし、ここにいふ力が超感性的使命に屬するといふことは、理論理性に對して優位する實踐理性が、感性を威壓し懾伏せしめ、その犧牲を求めてやまない「道德律の力」（Allg. Anmerk. nach §29）、乃至は、至上命令を以てする叡知的使命から區別されねばならない。蓋し、感性を峻拒する道德律の力そのものが崇高性ではなく、崇高なる美的現象に於ては、自然もまた吾々を壓倒せざる力を含蓄し顯示するし、かかる自然との無關心・無概念的關係の中に自然の外觀上の絶對威力が、吾々の精神力を異常に高めて、この絶對力に對して比肩する勇氣、抵抗する能力を吾々の中に喚起する（§28）、と言つた内外、主客の相關關係が指摘せられるからである。外界の自然が顯示する力も、内なる精神能力（自我）の力も、共に抵抗の大きさによつて、内外・自他が崇高であると言明せられる。その力、從つてまた抵

抗の大きさは、吾々に影響を與へる限りの、外界の自然に對する優越意識、それはまた吾々の內なる自然に對する優越意識である。これは超感的使命の意識にほかならない（§ 32）。力とは、外なる自然の絕對的な力を、內に越えて、それを、內からの抵抗能力によつて、もしくは比肩する勇氣によつて、却つて小なりとして怖れしめない樣な、內外の自然に對する優越意識、卽ち本來的には超感性的使命の意識である。これが力學的に見られた崇高の理念である。

さて、直觀に與へられる一切の現象は、外延的にも內包的にも量であり、連續量である（K. d. r. V. B. 212）。美的直觀において雖も例外たることを免れず、矢張り「量」であり、「大きさ」でなければならない。「力」は、所詮內からの抵抗の「大きさ」であつた（§ 32）。言ひ換へると、大きさと力とは不可分離的である。從つて崇高なるものは、具體的には「力に充ちた大きさ」を顯示してゐる對象にほかならない（Meischen p. 130）。それ故、崇高なる美的現象は、認識能力と意欲能力との內面的統一としての、「主體性の根本統一」の美的合目的性を方式とする自己限定であると云ふことができる（p. 115）。「主體性の根本統一」とは、趣味判斷を中心とする美的現象の深底に人間の全能力の歸一點として指摘した、現象としての對象及び判斷する主體の根柢に橫はる人間性の超感性的基體——しかもそれは、趣味能力の謎を解くべき唯一の鍵としての不定の理念——にほかならない。崇高の理念である、主體性の根本統一の自己否定的自己限定面としての「大きさ」と「力」、それは結局「量」であるが、前者が外に、卽ち直觀に關はる量であるなら、後者は內に、卽ち存在一般もしくは、實在に關はる量である。しかもそれは、客體の客觀的なる大きさでもなければ、道德律の力でもなく、崇高性の自己否定的なる現象的性格として、從つてまた美的合目的性の現象的性格として、大きさと力とを內面的に統一した美の量、卽ち「力に充ちた大きさ」でなければならない。外なる力に充ちた大きさと、內なる崇高の理念、卽ち主體性の根本統一とを包む崇高なる美的現象は、數學的には構想力の把捉作用と總括作用との不相卽性を惹起し（§ 26）、力學的には構想力と理性との對照、背反による、兩者の調和もしくは遊動を生起せしめるのである（§ 27）。構想力の把捉と總括との兩作用の不相卽性は、構想力と理性との背反による調和にほ

かならない。そこでは、理性（理念）は、構想力を外から威壓し慴伏せしめるのではなく、謂はば內から無理を强ひて（gewaltätig）把捉と總括とに不相卽を孕ましめるのである。蓋し、主體性の根本統一である崇高の理念の、外を否定的契機とする現象に於ける數學的側面と力學的側面とが不可分離的であるのは當然である。

美的合目的性實現の場である美的構想力は、元來、內から理性の浸透をうけてゐた故にこそ、一切の質料から自由にして合法則的であることができた。この美的構想力は、崇高なる美的現象に於ては、自然を理念に對する圖式として取扱ふものとせられた（§29）。本來、理念は理性の超越的概念であり、認識の規制原理である。圖式は純粹悟性概念（範疇）と直觀內容との間にあつて、これら異質的なるものを結合する構想力の働きを云ふのであらうが、しかしここでは、美的構想力の時間的展開は、自然を理念の時間化として思念せしめるのである。美的構想力は、理性（もしくは理念）の道具ではなく、却つてその時間的展開は、外を否定的契機として內に崇高性を喚起せしめ、外を內に越えつつ內なる崇高の理念を外に情感せしめると云つた、崇高の理念の主觀的、美的なる時間化の尖端であり、その場である。言ひ換へると、自然を理念に對する圖式として取扱ふ美的構想力の時間的展開は、崇高性卽ち主體性の根本統一の自己否定的自己實現の仕方、もしくはその現象形態と云ふことができるであらう。しかし、美的構想力を場として自己否定的に自己を實現する崇高性は、超感性的基體の意識でもあり超感性的使命の意識でもあり得る、主體性の根本統一であるが、それは崇高なる美的現象の、從つて自然と人間、外なる自然と內なる自然の深底に橫はる不可避的なる理念である。言ひ換へると、それは美的合目的性の原理としての理念であるほかはない。それは崇高の必然性の制約である。吾々は、この普遍必然的なる崇高の理念の前提の下にのみ、外との無關心・無概念的關係の中に、强大なる自然を否定的に內に越えては內に崇高の理念を喚起し、內に崇高性を情感しつつその自己否定として、外なる自然を怖れることなくその强大さを發揮せしめるのである。卽ち、外を否定的契機とする不快の媒介によりてのみ可能な快としての崇高の感情は（§27）、普遍必然的でなければならない。それは自然から獨立せる存在者の、もしく

は精神能力の崇高性の感情、即ち精神感情である。畢竟、それは、美的人間が外界を否定的契機として、自己の主體性の根柢、即ち人間性に徹してゆかうとする動搖ある否嚴肅なる生の展開であり、生の感情である。そこには、美的人間のより深くより具體的なる自覺の姿が、或ひは美的原理のより具體的なる現象が現れてゐるであらう。

然るに、カントは、美と崇高に關する二種の美的判斷、即ち觀照としての美的現象の普遍妥當性を、美の場合には靜觀的悟性に都合のよい樣な感性の主觀的根據へ、崇高の場合には感性に逆つては實踐理性の目的に協ひ、而も尙兩者が同一の主觀の中に結合されては道德的感情との關係に於て合目的的である主觀的根據へ關係づけた（Allg. Anmerk. nach § 29）、しかも後者の必然性の基礎を、人間の本性の中に、常識と共に各人に要求し得る道德的感情（畏敬の感情）への素質の中に、換言すれば人間の中なるこの感情の主觀前提の下にのみ置いたのである（§ 29）。カントは崇高の普遍必然性を道德的感情との關聯に於て何いたとどまる。獨自の原理を擔ふそれ自ら必然的なる崇高の感情を、道德的感情からは所詮窺ひ知ることはできなかつた筈である。何故なら、崇高の感情は、崇高性即ち主體性の根本統一の意識、主體性の根本統一を自己否定的に實現せしめる美的合目的性の意識にほかならず、しかも美的合目的性は一切の異質的なるものを主觀的に統一する原理であり、快適と善、傾向性と畏敬とからではなく、そこから此等のものが客觀的に分極化せられ得るでもあらう如き現象の原理であつたからである。

吾々は、美の普遍必然性、言ひ換へると趣味判斷一般の內面的可能性の根據を、美的共通感、もしくは評價能力の理念の名の下に美的人間性の超感性基體に置いた。それと同樣に、「判斷力の先驗的美學」（Allg. Anmerk. nach § 29）に於ける、崇高の普遍必然性の根據は、崇高たる美的現象の深底に不可避的なるものとして豫想せられる崇高の理念、換言すれば、吾々は內外の自然に對する優越意識を抱かしめずには措かない主體性の根本統一（美的人間性）に置かれねばならない。しかも吾々は、美的合目的性によつてはじめて外を否定的契機としながら美的人間性を感情することが出來る。この美的人間性の意識である崇高の感情は、美的人間のより深くより具體的な自覺形態をして、それ自ら必然的

である筈である。また美的構想力は、液形式な對象の直觀における多様を把捉・總括するに當つて、その客觀的總括の極限を内に越えては主觀的・感情的に擴大、緊張せしめられることによつて、卽ち美的合目的性の實現を擔ふことによつて、外を理念的方向に於て否定すると同時に、理念（美的人間性もしくは崇高性）に對する圖式を内に産出形成し乍ら外に見出すと言つた、所謂、自然を理念に對する圖式として取扱ふ様な、感情的・時間的展開をなす。そこに於て美的人間性が感情的に體驗せられる美的構想力の展開は、美的人間の自覺の場であり、その姿にほかならない。

シュミットは、崇高に於ける構想力を、美の場合に倣つて、「理性に適つて」（vernunftgemäß）働くものと規定した。卽ち、彼によれば、構想力は感情的能力としての自己の極限（Maximum）を乘越えて、理性理念（總體性）に適つて理性の役割を演じようとする故に、恰も理性であるかの如くに振舞ふとせられた（R. Schmidt, Kants Lehre v. Einbildungskraft S. 39-40）。成程、彼も指摘する如く、構想力は原本的には「圖式」「時間」の能力として、或る程度「悟性的」（vorstandig）であり、悟性の規則に適つて振舞ふものである故に、構想力の先驗的綜合は、……もしもそれが最高の要求に滿足を與へるべきものであるならば……「悟性に適ふ」（verstandes „gemäß“）ばかりではなく、……「理性に適ふ」（vernunft „gemäß“）のでなければならないであらう（S. 37）。彼は、美的現象に於ける構想力を、規則の能力としての悟性に基いて美的ならざる認識論の立場から導出しようとしたのである。そこに彼によつて見出された、構想力の「悟性に適ふ」「理性に適ふ」といふ活動は、構想力の獨自性を强調するものにほかならない。斯の如きは、主觀的演繹を書き換へたものに過ぎなひといふ酷評を免れることはできない（H. Mörchen, Einbildungskraft bei Kant S. 8-9）。

美的判斷力批判に於ける、もしくは美的判斷に於ける構想力は「直觀の能力」「概念描寫の能力」であつた（§35）。その作用は概念たしに圖式化する、もしくは自然を理念に對する圖式として取扱ふと言はれた。また自由にして合法則であるとも、把捉と總括とが不相卽にして合目的的であるとも稱せられた。かかる營みをする構想力を、美的現象

そのものの原理的考察から美的合目的性の自己限定或ひはその實現の場として、特に美的構想力と名付けた。美的原理の實現を擔ふ美的構想力の成立、即ちその時間的展開は、感情的に――平靜なる美の感情であらうと感動を伴ふ精神的なる崇高の感情であらうと――美的對象を産出する美的形式でなければならぬ。美的形式は、經驗的所與に對して無關心・無觀念的な直觀作用の中に美的對象を産出する原理である。即ち、「吾々が美もしくは崇高と看做す對象は距離を挿しはさんだ觀照の中に生起する」のである（Märchen S. 142）。かかる觀照の成立は美的合目的性の要求である。この要求に答へて、それを實現遂行するもの、それが美的構想力である。

しかし乍ら、吾々は、美なると崇高なるとを問はず美的現象の深底に、趣味の原理に關する批判を通じて或ひは外を否定的契機として、必然的に人間性もしくは主體性の根本統一、即ち理念を見出した。この理念の前提の下にのみ、言ひ換へると、この理念との關聯に於てのみ美も崇高も普遍必然的たり得たのである。そして、美的構想力の時間的展開は、構想力の不可解明的表象としての「美的理念」の名の下に（§57 Anmerk. I）、普遍必然的な美的對象を産出したのである。かくして、美を、吾々はまた一般に美的理念の表出と呼ぶことができるのである（§51）。その際、美的理念は、與へられた直觀を反省することによつて喚起され傳達せられるのである（§49）。美的理念は、美的人間の可能性を反省的に構想し、内に形成し乍ら外に直觀として實現することにほかならない。

然るに、カントがなした美の理想に顧慮を拂ふといふことは、メエルヘンが指摘する如く、人間固有の可能性を構想する自己企劃の仕方にほかならない（Märchen S. 142-143）。美の理想にしても、人間固有の可能性にしても、それは人間の叡知性に本づく窮局目的であり理想である。そこには美から倫理性への移行が窺はれた。また、カントが崇高の滿足の普遍的傳達可能性を道德的感情への素質の中に見出したにせよ（§42）、美なるものに關する知的關心が類緣的に道德的であり、よき道德的心術への素質を推定せしめるにせよ（§42）、それは決して、美的世界の必然性が道德的世界から導出せられるといふことではない。そこにはおのづから美の世界と倫理の世界との限界が劃されねばならぬ筈であ

る。倫理的現象をも美的に觀照することは美的原理の要求の一端ではあるが、美を倫理に據らしめることは絶對に許されない。兩者の關係は、恰も理性理念と美的理念とが對蹠（Pendant）をなす如く（§ 59）、原理的に異る。美的理念は、美的人間性もしくは主體性の根本統一を構想する美的構想力の時間的展開である。

しかし乍ら、本來、悟性と諸感官との兩者によつて判斷するよりほかなき吾々人間にとつては（§ 5）、一切の認識の根柢に要求せられる認識能力の主觀的合致、即ち主體性の根本統一は、確かに一つの理想的氣分ででもあらう。しかし、それが認識能力の感情的合致、即ち美的構想力の時間的展開として成立し、しかもそれが、より深い意味に於て、主體性の根本統一の實現であるといふ意味に於て美的理念と稱せられたのである。それ故、美的理念の發見は、主體性の根本統一の構想、確立と相卽する。この主體性の根本統一の問題を取上げたシラアは、人間の本性を感性本能と形式本能とに分けて、その統一を美學の根本問題とした。彼は問題の焦點を遊戯本能と呼んだのである（Schiller, Über die ästhetische Erziehung des Menschen）。遊戯本能の名の下に、畢竟、主體性の根本統一が美學の根本問題とせられたのである。この問題の解決、即ち主體性の根本統一の確立、從つてまた美的理念の發見は、美的人間性の確立にほかならない。そこでは、美的現象は、人間が自己の存在性を感情的に形成展開する姿、即ち美的人間の自覺であり、感情の中に繰り展げられる美的生の自覺でなければならない。換言すれば、自覺的に實現せらるべき美的人間性もしくは主體性の根本統一は、觀照に於ける創造性として、美的對象を與へられたる客體との無關心・無概念的な直觀の中に產出しなければならない。その際、美的理念は、對象が如何なるものであるべきかの概念にかかはることなく、ただ觀照が反省されることによつてのみ、喚起され傳達せられ得たのである。しかし、美的人間の眞に具體的なる自覺は、單に、觀照に於ける創造性としてのみならず、美なる對象を客體的に美的理念の表出として產出せしめずには措かない。從つて、美的對象は、觀照もしくは評價に於て、經驗的所與との不可分離的關係に於て產出せられるのみならず、更に、專ら美的に評價さるべき「美なる對象」即ち「美なる藝術」が、人間の手に產出せられねばならない。それが可能と

なる爲に天才（Genie）が要求せられた（S.43）。この名付くべからざる目的を實現する意志、名付けて美なる意志、もしくは美なる精神が、美的に合目的的であるべきものを天才の名の下に産出せねば措かない。卽ち天才は、美なる藝術を産出し創造する「生産的能力」である（S.43）。かくして、美學の根本問題である主體性の根本統一の問題は美的判斷力批判の課題と共に、その具體的なる解決を、美なる藝術を中心とする美的現象に見出さねばならない。

四

世界の一切の現象は、自然の法則による因果性か、自由による因果性か、孰れかによつて規定されてゐなければならないといふことは（K. d. U. Ⅴ）、理性の客觀的原理が要求する所であつた。然るに、美的現象は美的對象を感情的に體驗せしめた。それ故、人間が體驗し經驗し得るものには、自然律或ひは道德律に支配されたもの以外に、尙美的合目性を原理とする美的對象がなければならぬ。「單なる評價能力」としての趣味は（S.45）、あらゆる經驗的所與に向つて、無關心・無概念的な靜觀の中に感情的に美的對象を産出する。しかし、趣味の評價のあらゆる客體の中で、專ら美的に觀照されることを、根源的に要求するものがあるとすれば、それはそれ自ら美的に合目的的なるもの、卽ち美なる藝術である。

美なる藝術は、「自由による人間の作品」として（S.43）、自然から峻別され乍ら、同時に道德の世界からも原理的に明別せられた。それは獨自の原理に本づいて制作されるが、それを産出する能力を指して天才と呼んだのである。かくて、趣味は自然、道德並びに藝術の凡てに亙つて美的に評價する能力であると言ひ得るが、ひとり藝術のみは、自然や道德の如く美的ならざる原理もしくは立場から受け取られることを峻拒する。何故なら、天才は趣味を自己の訓育（躾け）として美なる藝術そのものを産出するからである（S.50）。單なる評價能力としての趣味は、與へられたる客體と不可分離的に、感情的に實在的な美的對象を産出する。しかしそれは、美的ならざる立場から見れ

ば、觀念的對象性をしかもたないであらう。然るに、天才が趣味に照らし乎ら產出した美なる藝術は、それ自體美的に合目的的なるものとして、專ら趣味によつて美的に評價されることのみを要求する。美的にのみ觀照せらるべき美なる藝術の創作は、自律的な美的合目的性の、從つてまた美なる意志のより深く、より具體的な要求でなければならない。

天才の所產は、「理性を根柢とする自由による人間の作品」ではあるが（§43）、特に美なる藝術と呼ばれた。そこには自由律が介入する餘地はなかつたのである。何故なら、藝術は彼岸的・超越的な理想への手段ではないからである。人間の手に成るものの中で、美なる藝術は、所與のものを素材としてそれとは別の或る他のもの、卽ち美的に合目的的なるものとして形成せられたのである。この美なる藝術は天才の藝術であり（§46）、天才はその可能性を擔ふのである。卽ち、天才とは、藝術に規則を與へる才能（天分）である。しかし、美なる藝術が如何にして可能となり成立するかを、何人と雖も論理的に敎へることも、學ぶことも不可能である（§46, §47）。何故なら、天才は修得され得る能力ではなく、「生得の心意素質」であり、「典型的（範例的）獨創性」であるからである（§46, §49）。この天才によつて產出せられた、美なる藝術に於ける美的・無制約的合目的性にとつて主觀的規準として役立つものは、「主觀に於ける單なる自然」と稱せられた（§57 Anmerk. I）。それは如何なる悟性概念も到達し得ざる、主觀の全能力の超感性的基體である。換言すれば、それとの關係に於て吾々の總ての認識能力を合致せしめることが、吾々の本性の叙知的なるものによつて課せられた究極の目的であると云つたもの、卽ち主觀的合目性の根柢に横はる、一種の主觀的普遍妥當的な先天的原理が「主觀に於ける自然」と呼ばれたのである（§57 Anmerk.I）。それはまた、吾々の外及び內なる自然の深底に反省的に求められて止まない超感性的な或るものにほかならない。成程、制約者に對して無制約者を求めて止まないのは理性一般の要求ではあるが、美的理性が求めて止まない無制約者は、吾々の內なる超感的なるものといふ不定の理念であり、自然と主觀とが相互に合目的的であるもの、所謂主觀的合目的性の原理として

の理念を指したのである（§57 Anmerk. II.）。この主觀的自然が、ノエシス的には天才の名の下に典型的獨創性を發揮し、ノエマ的には美なる藝術をして尙自然の觀を呈せしめるのである。卽ち藝術は、それが藝術と意識され乍ら、尙自然の觀を呈する場合にのみ美と言明され得るのである（§45）。

蓋つて、趣味判斷一般の內的可能性の根據、もしくは美的合目的性といふ主觀的原理は、吾々の內なる超感性的なるものといふ不定の理念であり、而もそれが、吾々自身にとつてその源泉が隱されてゐる、趣味能力の謎を解くべき唯一の鍵であると稱せられた。それを美的人間性の超感性的基體、更に崇高論では主體性の根本統一と呼んだのである。然るに、美なる藝術は天才の所產であり、それに對して主觀に於ける自然が規則を與へた。かくして、趣味能力の謎を解くべき唯一の鍵と目された理念は、主觀に於ける自然の名の下に、天才もしくは美なる藝術の謂はば謎を解くべき唯一の合鍵とでも稱すべきものである。主觀に於ける自然は、人間の美的・反省的態度の見盡さるべくもない深底に豫想せざるを得ない、主觀の全能力の歸一點としての超感性的なるもの、換言すれば、主體性の根本統一乃至は美的人間性の超感性的基體にほかならない。それは豫め槪念的に浮彫りにされることはできず、ただ人間の美的態度の無限の深底における思辨的論理的把握を拒む深淵とでも言ふべきものであらう。それが美的判斷力の唯一の原理、卽ち自然並びに藝術の合目的性の觀念論の原理であるにほかならない（§59）。それが、美の評價に於てその先天的なる規準を吾々自身の中に求めしめ、趣味判斷の根柢に自律性をもたしめるのである。その際、吾々が何を美と見るべきかを自然から學ぶのでもなければ、評價に於て自然が何であるか、もしくはそれが吾々にとつて目的として何であるかといふことでもなく、吾々が自然を如何に受容するかが、この原理にとつて肝要なのである（§59）。然るに、美なる藝術そのものは、悟性乃至は知識の所產としてではなく、天才の所產として考へらるべきものであり、從つてまたそれは、特定の目的の理性理念から本質的に區別され、それと對蹠をなす美的理念によつて、その規則を獲得すべきであるから、美的理念による滿足は、機械的意圖的技術としての一定の目的の達成に依存してはならない。換言

すれば、藝術美の根柢に目的の實在性ではなしに觀念性が横はらなければならないのである（§50 §5）。この様な、藝術の合目的性の觀念論の原理が、主觀に於ける自然と呼ばれたのである。この主觀的自然の自己否定的自己實現面としての美的現象、從つてまた美的構想力の時間的展開に於ては、感性的なるものと超感性的なるもの、主客、內外、時間と永遠等一切の異質者が主觀的自然即ち無底の深淵の上に、ひとしく美なるものとして合一し戲れるのである。

然るに天才は、經驗的には目的としての一定の概念即ち悟性に本づいて、豐麗なる現實の自然から豐かなる素材を取り來ると同時に、他面現實の自然を優越する「他の自然」（andere Natur）を創造し實現する（§49）。これは、見盡すべからざる不定の理念もしくは主觀的自然が、自覺的に形成せられたことであるが、その際目的としての一定の概念に對する生產的認識能力としての構想力の表象は、經驗の限界を越えて横はるそれの理念へ向つて少くとも努力するものであり、やがてそれに對して一種の客觀的實在性の觀を與へる、端的に言へばその理念を主觀的感情的に時間化する構想力の全內面的直觀、即ち美的理念として成立する（§49, §57 Anmerk. I）。それは、構想力の不可解明的表象として如何なる概念もこれに適合することはできない（§49, §57 Anmerk. I）。にも拘らずそれは、目的として與へられたる一定の概念の描寫に對して合目的的な表象として、即ちその概念そのものを、無限の仕方に於て美的に擴張して、多くの名付くべからざるものを思ひ合さしめる（§49）。かくして天才は、ただ主觀の自然のみが作り出し得る様な認識能力の特殊な比例と整調、即ち悟性の法則性と構想力との自由なる協和に於ける、自然的・沒意圖的な主觀的合目的性の成立としてあらはれる。約言すれば、天才は美的理念の提示もしくは表出の中にあらはれるのである（§49）。從つて天才の成立は、主觀的自然の自覺的形成であり、美的理念の成立を措いてはあり得ない。

美的理念とは與へられたる概念に盟合した構想力の表象であるが、天才はこの與へられたる概念に對して若干の理念を見出し、他面此等の理念に對して表出を探り當てるといふ幸運な關係の中に成立する（§49）。この幸運な關係

に於て美的理念を描寫する能力を、美的意義に於ける「精神」と呼ぶ。天才は、「精神の模倣を許さざる飛躍」によつてその典單的獨創性を發揮し、以て理念に對象性を附與して藝術を創造する。藝術作品は、「精神の所産」として、夫々「作品の精神」をもたねばならない（§45）。模倣を絶した精神の飛躍が、吾々の内外の自然を内に越えた高次なる自然、主觀に於ける他の自然を自覺的、形成的に表現せしめた。如何に自覺され、如何に形成せられたかは作品のみが語る。作品は美なる精神をうるはしく開示してゐなければならない。作品が語る意味、もしくはそれが表現する「他の自然」は、趣味のみが評價すべきである。それの評價は、概念の附隨物として他人に傳達せらるべき主觀的な心意氣分、即ち或る特定の概念に總括し切れない程多くのものを考へさせる美的理念による滿足として、心意諸力を生氣づける。美的意義に於ける精神は心意に於ける生氣づけの原理である（§46）。またそれは美的理念の描寫の能力でもあつた。蓋し、美なる精神が、天才をして自覺的に、即ち形成的に認識能力を躍動せしめて、精神をもつた作品を創造せしめるからであり、同時にそれが、觀照者をして作品の精神の名の下に、作品の無限の背景としての高次の自然（美的人間性）に向つて、心意諸力を合目的的に躍動せしめるからにほかならない。從つて美なる精神は、作品に於て、創作と觀照、天才と趣味とを貫通し兩者の底に流れる美なる藝術の原理であると云ふことができる。それが、天才即ち藝術家の先天的なる生産的認識能力をして、作品を「自然」として創造せしめる（§45, §47）。作品は現實の自然を超えた高次なる主觀的自然を擔ふ典型もしくは實例である。それを精神の飛躍によつて形成し得る天才は、まことに「自然の寵兒」である（§47）。

しかし一つの作品に於て、その成立に先立つて豫想せられた一定の目的は、その表象面に於て沒意圖的な觀を呈さねばならない。換言すれば、美なる藝術の所産に於ける合目的性は、たとひ意圖的であるにはしても、意圖的であるやうに見えてはならない（§45）。その作品は、「美なる對象」であるが、それを産出する天才は、それを評價する趣味を根源的に豫想する（§48）。まことに趣味は美なる藝術の缺くべからざる條件（conditio sine qua non）である（§

50)。けれども美なる藝術に於ける美的合目的性は、その根柢に目的をもつ目的なき合目的性とでも稱すべく、しかも根柢に横はる目的は、實在的なるものではなく、觀念的な目的である(§58)。美的合目的性が、自らの根柢に觀念的なる目的を見出すといふことは、精神が、例へば「山」といふ目的そのものを、藝術の觀念的内包たらしめることであり、「山」といふ「高次の所與性の搾ひ手」としての作品の成立にほかならない(Meckauer, Wesen-hafte Kunst S. 32)。作品は美的理念の描寫もしくは成立であり、それの美、即ち藝術美は「山」といふ概念によつて惹起される美的理念の表出である(K. d. U. §51)。畢竟、それは美的人間の眞に具體的なる自覺である。

カントによれば、美的理念は構想力の解明すべからざる表象とも稱せられた。表象の不可解明性とは、それを概念にもち來し得ないこと、即ち認識となり得ないことである(§57 Anmerk. I)。かかる構想力理解は、明らかに認識論的態度に於ける構想力の機能に位置づけられてゐることは否めないし、そこからは、藝術對象が認識の對象に對して有する全く獨自の構造は、區別せられても積極的に明らかにされ得ない。また理性理念を指し示すといふ單に附加的な不合理なるものによつては、藝術對象は決してその獨特の仕方で構成されないのである(Mitzelhen S. 117)。美的合目的性實現の場としての美的構想力が、内に精神を宿すことによつて、言ひ換へると、精神として理解されることによつて、その時間的展開が「美的理念」の名の下に、藝術家(制作)に對して規制的であると同時に、藝術作品に對しては構成的でなければならない(Meckauer S. 10)。美的理念は作品に於ける本質的なるものである(S. 17)。即ち、メツカウエルによれば、藝術に於て豫想せられたる目的は、「客體そのもの」、例へば「マリヤとして意識され得るものの本質」、もしくは「マリヤ一般」であり、それを廻つて無數に聚合する美的理念の「中心點」もしくは「窮極點」である。それは藝術制作の無限の課題として漂よふものであつた。美的理念はそれへの「直觀方向」である。「直觀方向」は概念的に浮き立たせることによつてではなく、專ら直覺的に體驗せられる描寫によつて獲得せられる。「直觀方向」が描寫と不可分離的であるといふことは、「直觀方向」の彼所にあつて、元來體驗され得べくもない「客體そのもの」

が「體驗の流れ」に內在化せしめられるといふことである。それは超感性的なるもの、例へば「マリヤ一般」を、感性的なるものによつて代表する「對象的代表作用」による作品の成立である。かくして、藝術制作の無限の課題であつたものは、藝術の「本質的核心」もしくは「觀念的內包」と呼ばれた。作品は、「本質的核心」と名付けられた、「高次の所與性の搾ひ手」としてあらはれる（V. 55-56）。以上の如く、彼は美的理念を「直觀方向」と「對象的代表作用」とに分析したと言つてよいであらう。それはまた、美たる藝術を中心とする美的現象の分析でもある。

元來、美的現象は、美的判斷力による高次の現象、卽ち法則性と對象性との原理的なる主觀的宥和であつた。從つて、美的現象は、先づ「直觀方向」が成立して、然る後に「對象的代表作用」が成立すると云つた時間的なる先後に分解され得るものではなく、寧ろその解決を迫られる課題を、解決しつつ見出す、言ひ換へると創作と觀照とが內面的に結付いた統一的現象である。美的理念は、作ることと見ることとが內面的に統一せられた、美たる藝術に對する「內面的形式附與の法廷」（V. 21）、換言すれば「藝術の自律的なる立法の規範」である（V. 11）。

しかし、美的現象が、趣味と天才、直觀方向と對象的代表作用、或ひはまた超感性的なるものと感性的なるものとの眞に具體的なる統一としての、「美たる藝術」を中心とする美的現象となるためには、美的理念を描寫する能力としての精神が要求せられた。作品は、精神の所產として夫々特有の精神をもつ。しかもそれは、主觀に於ける自然が規則を與えたものとして、「自然」と看做されねばならなかつた。それは美たる精神が、美的合目的性の原理としての「主觀的自然」、卽ち主體性の根本統一もしくは美的人間性の具體的たる自覺であることを物語る。蓋し、美たる精神は、美的合目的性の原理としての理念を形象的に表現するからである。それは、美たる藝術を中心とする美的現象の原理にほかならない。かくして、美たる精神は、趣味と天才とを貫通し乍ら、趣味能力の謎を形象的に解き、美たる藝術の謂はば鍵を握る美的理念を描寫する。言ひ換へると、主體性の根本統一もしくは美的人間性の自覺は、美たる精神として美たる藝術を創造することである。藝術は、藝術家がその極まることを知らない可能性を、如何に自覺し

たかを表現してゐる筈である。作品は藝術家の自覺の深さを語らねばならない。彼が藝術的生をより深く自覺すればする程、それ丈彼の作品は自他・內外、有限と無限等、凡そ一切の異質者をして益々明晰にその對立、異質性を尖鋭化せしめ乍らも、同時に測り知るべからざる、見極め盡すべからざる無限の深底の上に、それ等のものを主觀的・感情的に渾然として宥和せしめる。觀照者はそこに語られてゐる自覺の姿、卽ち作品の意味を見出し評價すべきである。

先に美學の根本問題として提出した、主體性の根本統一もしくは美的人間性確立の問題、從つてまた美的理念發見の問題は、觀照に於ける創造性として感情の中に繰り展げられる美的生の自覺であるのみならず、精神の名の下に、見ることと作ることとの內面的統一に於て、しかもそれは觀照に於ける創造性の具體的なる自覺として、美的人間性、主體性の根本統一を形象的に表現する藝術的生の自覺に到つて、その具體的なる解決をみるのである。そこでは、美的合目的性實現の場としての美的構想力の時間的展開は、精神的であり、美なる精神の實現の場と言ふべきであらう。美的構想力の營みは、「美的理念」として藝術の本質を開示すると同時に、それは、藝術の本質を直觀する生の態度としての、美的構想力の體驗である。

イシスの女神への頌歌程、崇高なることが語られた例もなく、また或る思想がこれ程崇高に言ひ現された例もないであらうと、カントは云つた（K. d. U. S. 119）。たとひ女神のヴェールが、人間を神から隔て、有限的・時間的なるものを無限にして永遠なるものから區別しようとも、そこには過去・現在・未來を貫ぬて在り、自らを有限なる人間から隔絕してゐる神が、際涯なき類似表象によつて、同時にまた表象が神によつて生氣づけられてゐる。まことに藝術は、吾々を日常的現存在以上に高めて、一つの別の、より高く、より美しい世界へと誘ふ（Mörchen, S. 522）。しかし、藝術的に解決すべく課せられた見盡し得ない無限なるものを、美なる精神は、その逞しくも美るはしい、時には悲痛にも深刻なる飛躍によつて形象的に、卽ち美なる藝術として解決するのである。自然と人生の一切の現象を、美的構想力の獨自の內容にまで高めしめたのである。美なる精神は、藝術家と觀照者の心意の中に、崇高なる感情と平靜なる感情とを漲らせ、如何なる概念的表現も到達し得ざる、未來への無際限なる展望を繰り展げしめるでもあらう。（完）